

話

を聞かせてください、と言われて、初めに思ったのは、どうにかして断れないものか、だった。学校の職員対象で、テーマはほとんどお任せに近い。何度か断ったのだが、企画した教員も譲らない。いくらか押し問答をし、少しばかり条件を付けて引き受けた。その途端にうんと気が重くなった。いつもこうだ。これ以上断って雰囲気が悪くなるよりは、と思ってしまうのだ。

退職前に職員の前で話をする、というのは学校という社会ではままたる話で、ぼくもこれまで少なからず先輩たちのお話を拝聴してきた。今回の要請も、それにのっとったもので、気を遣ってくれたのだと思う。今や学生が敬遠するほど忙しい職場と化してしまっているのに、自分の話を聞くのに時間を費やしてもらうなんて気が引けて仕方がない。ならば何とかわれようとするつぱり断ればいいものを、そういう対峙の仕方をまったくもって鍛えてこなかったのだ、これまで。

三十から四十過ぎのころ、職務上の要請もあつて講演をする機会がかなりあつた。まず、話を組み立て、キーワードをノートに並べてみる。それだけで話すときもあるが、慎重にいきたいときは、原稿を作る。問題はそこから先で、原稿を暗記しようとするのだが、これがうまくいったためしがない。覚える根気が続か

ないのを一として、二には、読むたびに言葉が別の記憶や考えを誘ってまわつた鎮まらない。三に、原稿通りでは読むことと変わず、話すとはそもそもその場限りのライブだろう、という思いが暗記を妨害してくる。直前までその調子なので、ついに「ええいままよ、なるようになる」と諦めるに至り、話し終わった途端に、何度同じ失敗を繰り返すのかと我が身を呪うのだ。自分で書いたものだから覚えられそうなのだが、暗記仕切れていない原稿をしゃべった後は、必ずどこか抜けている。そして原稿にないものが入る。たいていは、これを抜いては話がわからないだろう、と思えるものが抜けていて、聞き手への罪悪感が募っていく。

一度、手痛い失敗をした。話し終わってから、もう二度と講演は引き受けまいと思つた。ほとぼりが冷めた頃に、さらに痛い失敗をした。ほんとにこりごりだと思つた。今回引き受けてしまったについては、失敗から学びきれない優柔不断さゆえだが、もうここまできると、そのまま晒して後は聞き手の皆さんに委ねるほかない。

先日、講演を終えた。やつぱり抜いてはいけないところを抜いてしまった。死ななきや直らない類いだなと思つた。



専業ババ奮闘記 (その2) 38

木幡智恵美

出産 (5)

寛大、実歩がうちに来て迎える三度目の朝。布団から飛び出している孫たちを布団の中に押し込みながらの夜を過ごし、四時にその作業をしたことは覚えてる。その後、寝入ってしまったらしい。アラームの音に跳ね起きた。昨夕のことがあつて、少し肩の力が抜けたのかもしれない。

昨夕は、保育所迎えが私の担当だったので、寛大と実歩を車に乗せ、まずは娘のいる産科医院に寄つた。娘のいる部屋に入ると、娘の同僚が「今日はお休みだったんです」と笑顔を向けてきた。寛大は一目散に「おかあちゃーん」と、いつもの様子で娘に近づいていく。実歩はといえば、前回の寛大同様、母親と赤ん坊を取り巻くバリアに遮られてでもいるかのように、傍に寄ろうともしない。実歩が産まれた時の寛大と同じだ。いくら娘が「寛大、おいで」と言つても、近づこうとはしなかった。それが三日ぐらいは続いたか。

その寛大が、娘の同僚が「抱かせて」と言つて赤ん坊を受け取つた途端、お母さんの膝に座る。実歩の出産時に免疫ができていたはずの寛大でも、やはり恋しい母親と離れ、しかもその母の胸を赤ん坊に独占されたことで抑えていたものがあつたのだろう。「おかあちゃーん」と言つて抱きつき、泣き出した。すると、それに共鳴するように、実歩も泣き出した。「ほら、実歩もお母ちゃんに抱っこしてもらい」と、実歩を娘のところへ連れて行く。娘は両腕で二人の子どもを抱きしめ、自分も泣き出した。病室内は、「おかあちゃーん」の大合唱。寛大も実歩も、うちに帰るまで泣き続けた。お母さんと離れた寂しさを、お母さんを奪われた辛さを、二人とも思う存分泣いて発散できたのだと思う。実歩も、これからは素直に母親に近づけるだろう。

さて、また慌ただしい一日の始まりだ。朝食の準備をする間、寝部屋で夫と待つよう寛大と実歩に言い、台所に降りる。今日は、義母がかかりつけ医に通院する日だ。機嫌をとつて着替えさせ、準備しなくてはならない。いつもより、少し睡眠を多く取つた分、階段を下りる脚に力が入る。

30代フリーター やあ、ジイさん。菅義偉が記者会見で「崩壊」しない医療体制をつくるための医療法改正について問われ、「国民皆保険、そして多くのみなさんが診察を受けられる今の仕組みを続けていくなかで、コロナがあり、そうしたことも含めてもう一度検証していく必要がある。必要であれば改正するのは当然」と答えたら、国民皆保険制度を見直す気かという憶測が批判とともにSNS上に広がった。

年金生活者 既得権の打破を掲げる彼の頭にそうした考えがあつたとしても不思議ではない。それに「自助」「互助」「公助」を並べて「自助」を第一に置き、「公助」を最後に考える彼にとつて、「公助」の最たるものである国民皆保険は見直しの対象になり得るだろう。

このタイミングでそれをほめめかすようなことを言つたのは、政権からコロナ対策の主導権を奪つた医療界への意図返しの意味があつたと考えることもできる。「新しい生活様式」という

年金 左右のイデオロギーの差を大ざっぱに言えば、左派・進歩派が「弱者」の味方であるのに対して、右派・保守派は「強者」の味方ということになる。この分け方は右派・保守派から「われわれは弱者の敵ではない」という不満が出るかもしれない。だが、菅に限らず「自助」を第一に置き、「公助」を最後の手段と考えるのが右派・保守派であり、それは「自助」ができる力を持つ者、その意味で「強者」と呼べる者を中心に置く考えに導かれる。

これは歴史と伝統を重視する姿勢からのおのずと出てくる考えだ。長い時間に耐えて生き延びてきたものにこそ価値があるという思想だからだ。これが極端になると、適者生存を当然視する優生思想に行き着く。

これに対し、左派・進歩派は「弱者」の味方を自ら任じ、かつては当時の「弱者」だったプロレタリアート、労働者階級の味方として振る舞つてきた。やがてこの「弱者」は資本主義の

言葉で国民の自由の制限を求める医療界は「医療権力」と呼ぶにふさわしく、政権や与党に代表される「政治権力」はそれに押され続けてきた。そして国民も「医療権力」に従つてきた。

ところが、2度目の緊急事態宣言が出ても最初の宣言のときほど人出が減つていない事実にあらわれてるように、国民の多くは医療の専門家の言うことをいつでも聞くとは限らなくなつてきている。「医療崩壊」の危機を訴えられても、そうならないようにするのがあなた方の責任のはずなのに、この1年なにをしてきたの？という気持ちがあるのだと思う。

経済を止めないことに固執してきた菅にとつては、そうした国民の気持ちの変化は「医療権力」を牽制するチャンスと受け取れるだろう。

30代 逼迫する新型コロナの病床を確保するため、政府は、医療機関への協力の「要請」を、より強い「勧告」に改め、正当な理由なく従わない場合は機関名を公表できるようにする感染症

高度化とともに「自助」のできる「強者」に変わっていく。それでも彼らが資本主義社会の「多数派」であることに変わりはないので、「弱い多数派」はいなくなつてしまった。いま左派・進歩派が味方しているのは「弱い少数派」であり、その代表的な存在が障害

法の改正案を今国会に提出すると報じられている。

年金 コロナ対策では、医師会や病院業界に代表される「医療権力」の言いなりになるしかなかった霞が関の「官僚権力」と、政権および与党の「政治権力」が巻き返しに出たと見ることができる。

朝日新聞は「今回の改正案には官邸の意向が働いた」と背景を説明し、菅義偉が日本医師会など医療団体と面会して「必要な方に必要な医療を提供させていただくために、さらなるご協力を賜りたい」と要請したと報じている（1月16日朝日新聞朝刊）。国民皆保険をめぐる菅の発言はやはり、言うことを聞かないと既得権を削り取るぞという医療界への脅しだったのか、と思わせる面会だ。

30代 コロナ対策をめぐつてはイデオロギーによる対立も見える。左派・進歩派が感染拡大の阻止を最重点にするのに対し、右派・保守派はそれによる経済の停滞を食い止めることを重視する。

者、少数民族、難民などだ。

そうした「弱い少数派」に高齢者を加えれば、左派・進歩派がコロナ対策で経済より感染防止を重視するのがわかる。青壮年にくらべて重症化したり、死亡したりする危険がずっと大きい高齢者をウイルスから守るためには、経済を犠牲にするのもやむを得ない。経済の主な担い手は社会の「多数派」である青壮年であり、彼らにばかり「自粛」してもらうほかないという考えに行き着く。

これは余命の少ない高齢者に手厚い施策をするか、未来のある青壮年に手厚い施策をするかという二者択一的な問いを突きつける。どちらを重視するかは政治家もその道も専門家も公には口にできない難しい問題だ。それが完全に解けるのは、みんなで分け合うパイが限られた大きさを小さくするとき、つまり富の稀少性が消滅するときしかない。それまでは重点をどちらに寄りにするか、その度合い、その分量の最適化を求め続けるほかない。

ニュース日記 770  
中村 礼治

## 「政治権力」 対 「医療権力」